

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 10 月 5 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	川口ゆり

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
タンザニア、ゴンベ国立公園・セルー動物保護区
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
タンザニアツアー
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 9 月 21 日 ~ 平成 26 年 9 月 30 日
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
アフリカ研究センター、座馬耕一郎博士
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
このたび、野生チンパンジー及びサバンナに住む動物の観察を行うためタンザニア、ゴンベ国立公園とセルー動物保護区を訪れた。座馬耕一郎博士が同行してくださった。参加者は他に、京都市動物園から2名、東山動物園から2名、日本モンキーセンターから2名、霊長類研究所から3名、一般の方2名を含む計13名であった。日程は以下のとおりである。
2016年9月21日 関西国際空港発 22日 ダルエスサラーム着(ダルエスサラーム泊) 23日 ダルエスサラーム発、キゴマ経由、ゴンベ着(ゴンベ泊) 24日 8時-14時半 チンパンジートレッキング 16時半頃 Anthony Collins 博士のキャンプを訪ねたのちトレッキング(ゴンベ泊) 25日 8時-13時頃 チンパンジートレッキング ゴンベ発、キゴマ着(キゴマ泊) 26日 キゴマにて市内観光 キゴマ発ダルエスサラーム着(ダルエスサラーム泊) 27日 ダルエスサラーム発セルー着 10時-13時15分 ボートサファリ 16時-18時すぎ ゲームドライブ(セルー泊) 28日 6時半-9時 ウォーキングサファリ 10時-13時 ゲームドライブ セルー発、ダルエスサラーム着(ダルエスサラーム泊) 29日 ティンガティンガ村、スリップウェイにて市内観光 ダルエスサラーム発、ドバイ着 30日 ドバイ発、関西国際空港着
ボートやセスナでの移動や移動の待ち時間に行った市内観光も新鮮で楽しかったが、以下、ゴンベ国立公園とセルー動物保護区に絞って報告する。
【ゴンベ国立公園】 9月24日 ゴンベは面積およそ56平方kmの国立公園である。チンパンジー研究者のJane Goodall博士が研究を行った場所として名高い。ガイドによればチンパンジーは3つのグループからなり、北(40頭)、南(17頭)のグループは人付けされておらず、50頭ほどの中央のグループは人付けされている。今回見たのはすべて人付けされている群であった。規則により、人獣共通感染症を避けるため一時間以上同じチンパンジーを観察することはできない。 チンパンジーとの最初の出会いはかなり突然だった。トレッキングの準備をしていると、宿舎の前で人声がし、急いで出ていくとすぐそばに黒い二つのかたまりがあった。こんなに近くにいるのはヒヒに違いない、と思ったがそれがチンパンジーだと気づいたころには2頭のオス(FaustinoとSamson)はマンゴーの樹に登り採食を始めた。ヒヒもマンゴーの樹で採食したかったようだが、チンパンジーがいる間は木に登らなかつ

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

た。40分ほどしてチンパンジーは樹から降り森へと去った。その後、トレッキングをはじめ斜面を登り、しばらくすると Jane's peak と名付けられた開けた場所に出た。Jane 博士の本にも登場する場所である。標高 1020m。非常に見晴らしがよく気持ちの良い場所であるが、今回ばかりは、そんなことよりチンパンジーが見たい、と気持ちがはやる。



マンゴーの樹に登るチンパンジーのオス



連れ立って森へと消えていった



Jane's peak からの眺望



マンゴーを食べるアヌビスヒビ

Jane's peak から歩くこと 40 分。10 時 25 分、G family に遭遇する。45, 6 歳の Glemland (Glemlin?) とその子の Gley (8 カ月) と Gai (33 歳)、Gai の子の Google (5 歳) と Gabo (1 歳)。見えない奥の方の茂みに Nasa とその子がいた。年の近い Gley と Gabo が Gai と思われるオトナのもとでじゃれて遊んでいた。Google がそばの木に登ると、Gley もその後を追って木に登る。Gai (?) はわが子を気にするように、寝ころびながらも頭を持ち上げ、木の方を見上げる。それから 30 分後、コドモがまず動き、オトナたちがそれに続くようなかたちでグループは移動していった。

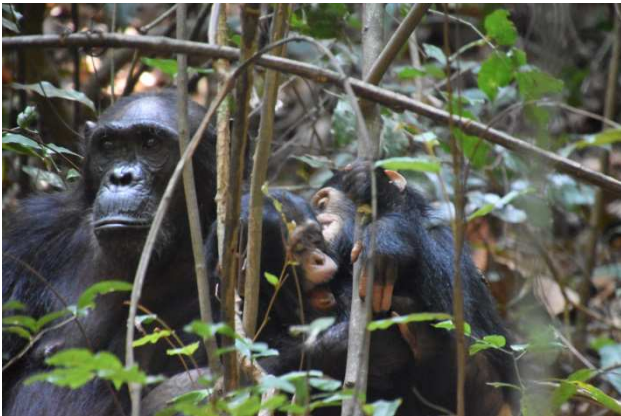


5 か月あるいは 8 か月のアカンボウ

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



5か月あるいは8か月のアカンボウ



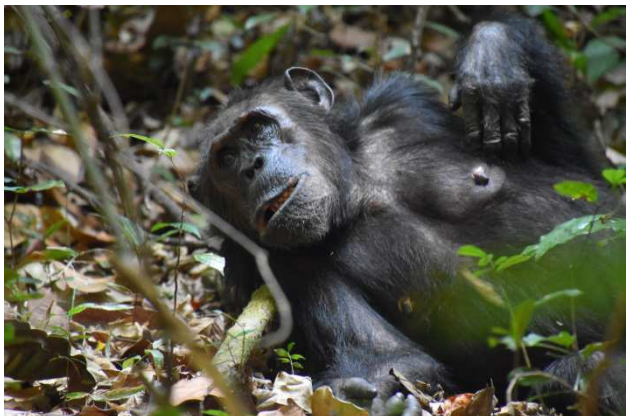
オトナメスのもとで遊ぶアカンボウたち



Google (5歳)



「慈しみ」と表現したくなる表情

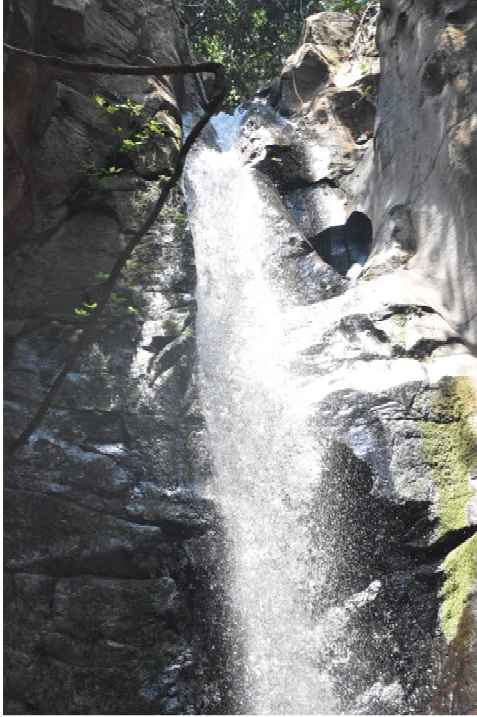


子の方を気にするオトナメス

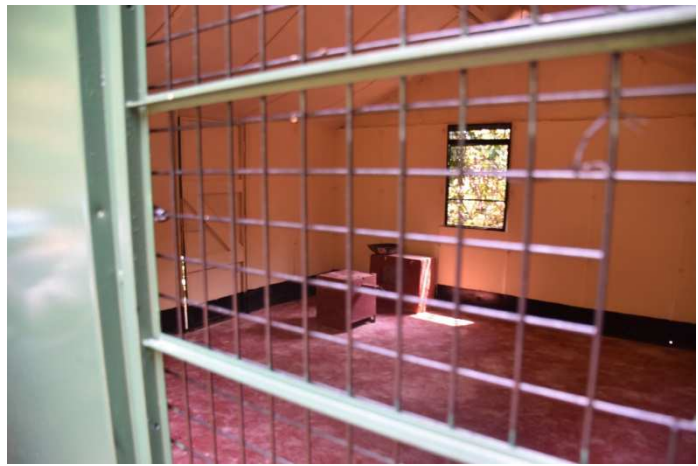
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

その後は、アカコロブスやアヌビスヒヒなどに出会いながら、滝についた。そこでは現地の小学生が遠足できていて、記念写真を撮った。最後に 14 時頃、Feeding point を訪れた。ここは、Jane 博士が餌付けを行っていた場所である。ポリオが流行していたこともあり、2000 年に餌付けを行うのは終了している。バナナを置いたうえに蓋があり、小屋の中からひもを引くとその蓋が開くという仕掛けだったらしい。



滝



フィーディングポイント

16 時半頃、希望者のみで再度出かける。まずは、ヒヒの研究者である Anthony 博士を訪ねた。Anthony 博士は以前、他の先生から、ゴンベに行くのだったと紹介を受けていた。また前日の夜、宿舎の前で星を眺めている際、偶然お会いしていた。Anthony 博士はお部屋に招いてくださり、ゴンベに 2500 - 3000 頭いるとされるヒヒについて話して下さった。ヒヒの良い点はと聞かれて、知的であること、素早いこと、適応的であることを挙げられたのが面白かった。博士に別れを告げ、しばらく歩くと、アカコロブスとアカオザルとブルーモンキーの混群に出会った。Albetia grabelime という樹にいた。ブルーモンキーは尻尾が切れている個体があった。チンパンジーのせいと考えられる。アカオザルとブルーモンキーではハイブリットが生まれることもあるらしい。



アカコロブス



アカオザル

9 月 25 日

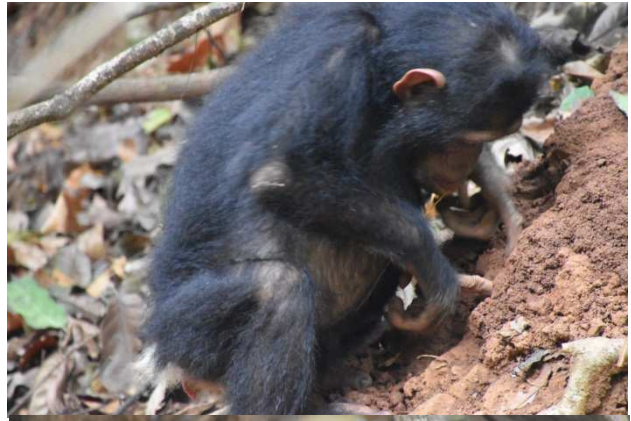
8 時に出発する。それから一時間後に Golden とその子で 3 歳ほどの Glama を樹のかなり高いところに発見した。しかし、視界が悪いうえほとんど動かないため、よく見えない。それなりに長い間そこにいたが、チンパンジーの移動にあわせて我々も移動する。野生はやはりこんなものなんだ、初日が見えすぎただけなのだったと思った頃だった。ガイドがゆっくり静かに進むように、と注意し藪の中を進んでいった。"fishing"と聞こえた気がし、聞き返すとやはりアリ釣りをしているとのことだった。そして次の瞬間、視界が開け、間近で先ほどの 2 頭がアリ釣りをしていた。シロアリ釣りはゴンベに特有の文化であるため、ゴンベに来たからには一番見てみたい行動だった。母子は別々の場所でシロアリ釣りを行っていた。信じられないような光景だった。母親は淡々とシロアリをつつては食べていたが、コドモは母親のようなやり方でやることもあるも

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

の、両手の人差し指を穴に突っ込むこともあり母親ほどスムーズには行えていないのだろう。奥の方には Elisa とその子の乳児 Espelanse (個体名不確か) がこちらを窺っている。この E グループはヒトを恐れるらしくずっと距離を保っている。Glama は 2 個体に気付くとあわてて母親にかけよった。しかし少しするとまた離れてシロアリ釣りを再開した。その後も Glama はアリ釣りの場所を母親の近くなどに変えたり移動したりしながらシロアリ釣りを続けた。12 時過ぎには 1 時間観察したので我々はその場を離れた。その後、アカコロボスとヒヒを観察しながら宿舎に戻った。

非常に満足し、14 時過ぎにボートに乗り込みゴンベに別れを告げた。



(上) シロアリ釣りをする Glama。下唇を突き出している

(上) Glama は指も使う

(中) シロアリ釣りをする Glemland

(中) 母親のもとに駆け寄る Glama

(下) シロアリ釣りをする母子

(下) 奥の方で母親にグルーミングをしてもらう Espelanse

【セルー動物保護区】

9 月 27 日

セスナでセルーに到着する。着くなりサファリカーに乗り込みキャンプへと向かう。10 分ほどの道中であるが、その間にもさっそくインパラとキリンが見え、期待が高まる。キャンプにつき、10 時から 13 時 15 分までボートサファリを行う。詳細は割愛するがたくさんの動物が見られた。特に、何個体ものカバが鼻から上だけを水面に出してこちらを窺っている光景と動物園で見るとようなワニが見られたのが印象深い。最後の方には運よく水を飲みに来た 5 頭のゾウがみられ、そのなかには子ゾウもいた。16 時から 18 時すぎまでのゲームドライブでも、シマウマやバッファローなどたくさんの動物が見られた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



上から、インパラ、ワニ、ゾウ、ジサイチヨウ

上から、カバ、ウォーターバック、シマウマ、ヌー

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



キイロヒヒ



バッファロー



キリンの樹



天の川

9月28日

6時半から9時までウォーキングサファリに出かけた。こちらは植物中心だったが、ガイドから多くのことを学んだ。特に興味深かったのは Whistling thorn acacia という、キリンが葉をが食べる樹である。葉を守るため頑丈なとげがたくさんあり他の動物は食べられない。キリンは枝先のとげが柔らかい部分をしながら長い舌で葉を食べることができる。しかも、とげのこぶの部分にアリが入っており、キリンが葉を食べようとするとその振動で出てくる。葉が食べられるとこのアカシアはタンニンをだすようになって、キリンもしばらく採食すると別の樹に移るといふ。さらには、このアカシアは樹同士が根を通じて隣の樹と「コミュニケーション」し、食べられたという情報を共有するといふ。どのようにこれが行われるのかは聞くことができなかつたが興味深い植物である。そのほかに特に印象に残っているのはキリンの死骸である。2、3週間前に死んだ7-10歳ほどの個体であり、内臓などは残っていなかつたが外側は残っていた。野生動物でありながら近くで見ることができ、皮膚は残っていながら同時に骨格も見ることができ、不思議な気分だった。

10時からはゲームドライブをしつつ飛行場に向かった。ここまででたくさんの動物を見たものの、アフリカのサバンナで私はどうしてもライオンが見たかつた。ガイドにライオンは見られないだろうかと尋ねたが、最後のゲームドライブは短時間であり難しいだろうとのことだった。ホロホロ鳥など最後のセルを満喫して半ばあきらめかけたころだった。突然ライオンに出くわした。夢中でシャッターを切るうちに、彼らは樹に登りだした。しばらくすると、姉妹とその子が2頭ずついることが分かった。一頭のオトナメスが地上に、一頭のオトナメスと4頭のコドモが樹上にいるという状況になっていた。コドモは20-22カ月とのことであった。まだコドモなのでオスもたてがみがなく、足には模様が残っている。彼らは空腹らしく、コドモたちはまだ狩りができないため、母親からトレーニングを受けなければいけないようである。しかし、子ライオンたちは樹の上でだらんと休み始め、ライオンがネコ科であることを思い出させる平和な光景となった。そのような状態がしばらく続き、まずオトナメス2頭が移動し始め、一頭、また一頭と徐々にコドモも木から降りて行った。樹に登るのはスマートだったが、降りるのは怖々といった感じでどちらかというに不得意そうだった。少し離れた木陰にたたずむ彼らを後にして我々は飛行場へと向かった。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



上から、Whistling thorn acacia、キリンの死骸、生きたキリン、コドモのライオン

上から、Whistling thorn acacia、キリンの死骸、ホロホロ鳥、木に集まるライオン

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



木に登るライオン



ベルベットモンキー

今回のツアーでは本当に運に恵まれていたと感じた。ゴンベで最も観察したかったシロアリ釣りを、セルで最も観察したかったライオンを目にすることができた。大型ほ乳類を檻越しでなく観察するのは不思議な気分だった。普段、研究所では同室するなど考えられずグリッドを挟んで接する際に常にリスクを頭に入れておかなければいけないチンパンジーと同じ空間にいた。その気になればあちらは数秒後には我々のほうへ突進することも可能な距離でありながら、少なくとも見かけ上はこちらを気にすることなく行動していた。空腹なライオンが5頭も目の前にいたが、不思議と恐怖は感じなかった。そのほか、動物園で見る動物がすべて隔てるものなくそこにいた。

また、私はアカンボウを研究テーマにしているので、チンパンジーの赤ん坊の様子をじっくり観察したこと、実験に用いる写真や動画を手に入れられたことが収穫だった。アカンボウはコドモと異なり、熱に浮かされたようなぼんやりとした表情をしていたのが印象的で、いわば「物心つくかどうか」がアカンボウとコドモの一つの差なのだろうかと感じた。後から考えると、チンパンジー以外にもアヌビスヒヒ、ベルベットモンキー、ゾウ、ヒゲイノシシ、インパラ、ライオンとたくさんの母子を一瞬だけのものもあるものの観察できた。

加えて、アフリカに対する敷居が下がったのも大きな収穫だった。今まで数多くのアフリカのフィールドワークの様子を学会発表などで見てきたが、やはり行ったことのないアフリカでの研究は大変そうという印象だった。しかし今回の旅では危険を感じることはほとんどなかった。体調もそれほど問題なかったし、街なかの治安も東南アジアに行った時とたいして変わらないように思えた。だが一方で、これでアフリカでのフィールドワークをわかった気になってはいけないとも感じた。例えば他のメンバーは空港で危うくいわれのない罰金を請求させられるところだったし、今回安全な旅となったのは同行してくださった座馬氏のおかげであるところが大きいだろう。また、タンザニアは比較的治安の良い国であったが国によってはもっと注意を要する国もあるだろう。そのことを気に留めながらも、今回の旅は大きな経験となった。

反省点としては危惧していた通り、写真を撮ることに夢中になり、あまりノートに記録できなかったことである。今回はきちんとした観察を行うには期間も短く、写真も重要な資料ではあるが、毎晩欠かさず思い返して記録をつけることをした方が良かったかもしれない。また、ゴンベのトレッキングなどで疲れることはなかったが、移動が多く、ボートや飛行機、バスなどの乗り物に疲れてしまったのが残念であった。ただ、こちらは今回のような短期間の日程ではどうしようもないように思う。座馬氏もフィールドで精を出しすぎるとマラリアにかかるとおっしゃっていたので、もし今後フィールドワークをすることがあれば、疲れをためない工夫が大事だと思う。



キゴマでの昼食

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

6. その他 (特記事項など)

座馬博士にはタンザニア滞在中、大変お世話になりました。他のメンバーの方も大変親切にしてくださいました。ありがとうございます。このツアーはPWSの支援を受けて行われました。感謝申し上げます。